

■■■ ミソサザイと猪の話 ■■■ ⇒ 猪の話



ミソサザイが猪を退治した話は、幼少のとき母から聞いたのと、後にある木挽から聞いたのと二つあり、初めの部分が少し異なっていた。

ある時、猪がミソサザイを嘲り、俺は世界中で一番強いと威張ると、負けぬ気のミソサザイは、俺はこれでも鷹の仲間だから強いと争い、ついに優劣を決する段になり、ミソサザイはまっ先に猪の耳の中に飛び込み、チョンチョン啼きながら嘴で突き立てたので、猪はたまりかねて頭を振ったがおよばず、岩角へぶつつかって頭を割って死んでしまう。これが一方の話で、今一つは何でも猪が無法なことをするので、これを懲らすべくミソサザイが義侠心から戦いを挑み、やはり耳に飛び込む話であったが、遺憾ながら今は判然と記憶しておらぬ。

ミソサザイは自分の郷里三河長篠辺では、ミソッチョと呼んでいて、味噌部屋にいるものなどと言った。数年前、村の街道端に茶店をしている男から聴いた話は、猪とは関係がないが、珍しいからことのついでに報告する。

今から一〇年ばかり以前のことであった。段戸山に杣をしていたという男が店へ来て休んだが、たくさんな荷物の中に鳥籠を提げていて、その中にミソサザイが四羽入っていた。それがまことによく馴れていて、籠から出すと手にとまったり肩に上ったりして、見ていても羨ましいようであったから、五円だすから一羽譲ってくれぬかと掛け合ってみると、これだけは一〇円でも手放せぬとあって、応じなかったそうである。何でも久しい間山小屋の住居をしているうち、巢から雛を捕ってきて五つ育てたが、あんまりよく馴れて、あるとき隣の小屋の風呂に行くと、五つが後をついて来て、つい一羽だけは風呂桶のそばで、踏み殺してしまったと語ったそうである。今度事情があつて久しぶりに国へ還るのだと、身上話などしたが、妻子もない一人者であったという。たんなる無脚の友であったか、はた何か必要があつたのか、飼い方や餌のことなども何も聴いてみなかったが、深山の生活が見えるようで、忘れられぬからこの機会に書きとめておく。